被災地派遣レポート＜第１回＞

江東都税事務所副所長兼総務課長
（第一次石巻市派遣隊総括班長）　　金山　芳樹

■被災地へ

平成 23 年 4 月 2 日（土）朝 9 時半、東北地方太平洋沖地震第一次現地派遣隊 70 名が宮城県に向け、マイクロバスに分乗して東京を発った。派遣先及び人数の内訳は、南三陸町へ 50 名、石巻市へ 20 名である。私たち石巻派遣隊は、主税局、中央卸売市場、生活文化局、環境局の混成部隊であり、男性 18 名、女性 2 名が 5 人 1 組となって4つの班を構成している。初日は、仙台市内の宮城県庁舎で被害認定調査の研修を受けた後、会議室に寝袋で一泊し、翌朝、班ごとにレンタカー4台に分乗して、石巻市に向かった。

全壊地域（石巻市日和が丘2丁目付近）

私達の役割は、石巻市による被害認定調査の補助だ。市税務課の職員に都派遣職員 20 名及び宮城県庁からの派遣職員数名を加え、3～4 人 1 組の班を 15 班程度作り、分担して市内各戸の被害状況調査を行うことだった。

調査の目的は、「り災証明」を発行するためのデータを整備することにある。「り災証明」は義援金の支給など各種公的な支援の申請に必要なため、住民からの早期発行の要請が強く、市としては、5 月初旬までには全戸について調査を終了したいとのことだった。

■都派遣隊の心意気

市役所での説明会終了後、宿舎である山寄りの高台に建つ老人健康センター（休業中）に案内された。1階部分は市社会福祉協議会のヘルパーさんたちが訪問看護、介護の活動拠点として使っていた。ヘルパーさんの多くも被災者であり、家や家族を失いながらも、そこを宿舎として活動を続けていた。

宿舎での生活様子
老人福祉センター「寿楽荘」（石巻市日和が丘1丁目）

1階にはお風呂やシャワーがあり、ヘルパーさんからは、一緒に使ってくださいとの申し出があったが、4人の班長で協議した結果、「多くの被災者やこれから仲間として働く市職員の多くがお風呂を使ってない中で我々が使うわけにはいかない」、「自分たちの力で自立した支援活動を続けるべきだ」ということで意見が一致し、隊員全員に意見を求めたところ、異議なしということで、その話は丁重にお断りすることになった。班長と隊員の心意気に打たれる。

若手職員の発案により、その他にいくつかのルールをつくった。①地震のときはガスコンロを消し、ベランダへ逃げる、②靴は玄関に置かず、ベランダに置く、③残飯は出さない、ごみはできるだけ小さくして、東京へ持ち帰る、④電気、水道を大切に使う、⑤後に続く班のことを考え、毛布、寝袋はきれい使う、そのためにきれいな靴下を履いて寝る、などである。

また、調査をするときの心構えとして、①まず班長の名前を覚え、良好なコミュニケーション、チームワーク維持に努めること、②補助者としての立場を自覚し、助言は積極的にしてよいが、責任者である班長の判定を尊重すること、③自立的活動と体調管理のために昼食を必ず持参し、控室（休憩室）に置かれた飲食物に手をつけないことを全員で確認した。

4泊5日分の食料（アルファ米、レトルト食品など）

石巻滞在中は、三食すべて自炊である。持参したカセット式ガスコンロで沸かしたお湯を使って、カップうどんやレトルトカレー、乾燥ピラフなどを食べる。火を通したばかりの温かい食べ物は、被災地では、ある意味ぜいたくかも知れない。

ウレタンマットの上の寝袋は、結構暖かくて、思っていたより快適。衣類等を利用して、うまく枕を作れば、よく眠れる。

■調査開始

翌朝は全員6時までには起床。7時 45 分、班長の「行くぞ！」の掛け声で、レンタカー4台に班別に乗り込み宿舎を出発した。いよいよ始まる調査に、みんな緊張はしているが、元気な顔つきだ。

集合場所である市役所脇広場には、都派遣隊が一番に到着した。私が編入された第５班の今日の調査地域は市庁舎と線路を挟んで北側にある
駅北地区約 200 戸だ。

ほとんどの家屋が床上 100cm前後の津波被害を受けている。各戸の被害の程度は、全壊、大規模半壊、半壊、一部損壊の 4 つの区分に判定される。被害の状況をより正確に判断するため、できるだけ各戸居住者に声をかけて、被害の状況を聞き取り、判断材料とした。柱、壁が傾き、ほぼ、全壊状態と判定された家屋の中では、年老いた居住者を励ましながら、ボランティアグループの若い男女が、泥まみれになって、家具の運び出しや汚泥の除去を手伝っていた。

罹災状況の調査の様子
（石巻市立町２丁目）

4 月だというのにときおり雪が舞い、北風の吹きぬける寒い日だった。懐炉を背中に貼り、防災服の襟を立てても十分な効果は得られず、もう一枚着てこなかったことを悔やんだ。調査票記入用の鉛筆を握る隊員の指も赤くかじかんでいた。しかし、そんな寒さの中でも、何日も不眠不休に近い状態で働き続けているはずの市の職員ふたりは、精力的に調査を続ける。私たちもそれに続いた。

■被災者の思い

翌日は、私は、第１班に編入された。市職員を含むメンバー４人は、まず、市庁舎から西に車で 10 分ほどのところに位置する大街道北地区へと向かった。高齢の夫婦ふたりだけで家の片づけをしている。私たちの姿を見つけると、おばあさんが家の中から飛び出てきた。「電気会社も、ガス会社も電話に出ないし、年寄りふたりだけではどうにもなりません。どうか助けてください。」と、涙を流しながら、拝むように手を合わせて、私たちひとりひとりに助けを求めるが、私も何と答えていいのかわからない。班長が、市役所の相談を受付ける部署を紹介し、り災証明の話や義援金支給申請の話をすると、少し落ち着いたが、おばあさんの表情から不安が去ることはなかった。

次に調査した鹿妻北地区では、床上、床下浸水の被害を受けた家も相当数あるが、浸水の被害がなく、地震による基礎や壁等への被害にとどまった家も多い。そうした家では、大抵、何家族かの被災者を受け入れており、「自分たちは、家を流された地域の人に比べれば、まだましだ。」と他の被災者を思いやる声が多く聞かれた。しかし、調査に当たっては、被災地の人々が抱える測り知れないストレスを思えば、その心情に十分に配慮した行動や言い回しが必要だ。市職員の話では、「大丈夫」ということばが被災者を刺激して、トラブルに発展しそうになった例もあるという。

■任務を終えて

当初予定されていた翌 3 日目の調査は、予定を繰り上げて翌朝早く到着した第 2 陣に引き継がれ、第 1 陣の任務はこの時点をもって終了した。新旧班長を連れて市役所へ行き、調査統括の A さんに挨拶すると、「東京都さんの職員は、班長を補佐して、本当によくがんばってくれている。おかげで、調査が計画以上に順調に進んでいる。」と言われたときは、本当に誇らしく、嬉しく感じた。

5 日間を通して隊員ひとりひとりの士気と規律は極めて高かった。みな、よく協力し、一丸となって、任務を遂行できたことに満足している。寒さの中での長時間の調査をものともせず、また、起床時から就寝時、そして睡眠中に至るまでの二十四時間、被災地特有の厳しい環境によく耐えて、各隊員は、立派に任務を遂行してくれた。各自が心身両面での自己管理を徹底してくれたおかげで、恐れていた風邪や食中毒にかかる者もなく、また、事故を起こし、トラブルに巻き込まれる者もなかった。

少しでも被災者のために役立ちたい、被災地復興の一助となりたい、そう願う隊員ひとりひとりの思いが伝わってきた。そして、私自身、その思いに支えられて、何とか、「先遣隊隊長」としての任務を果たすことができた。第一次派遣隊の隊員の皆さん、ありがとうございました。最後に派遣部隊の活動を陰から支えてくれた総務局人事部及び宮城県事務所の方々に感謝して、第一次石巻派遣隊活動の記録としたい。後続隊の参考となれば幸いである。

派遣隊の集合写真
（老人福祉センター「寿楽荘」前）